

東日本大震災から 12 年 —大槌町訪問—

沖縄県医師会災害医療委員会委員長 出口 宝



防潮堤と水門に囲まれた市街地（本町方面）、中央が三陸鉄道リアス線大槌駅

1. はじめに

沖縄県医師会（以下、本会）は東日本大震災において、岩手県上閉伊郡大槌町に災害医療救助班（後に JMAT）を派遣し医療支援活動を行いました。10 年の節目に訪問したいと考えていましたが、コロナ禍のために実現せずに 12 年が経ちました。

令和 5 年 3 月 9 日から第 28 回日本災害医療学会が岩手県盛岡市で開催されました。昨年の演題募集が開始されるとともに本会災害医療委員から「明日からあなたも JMAT—沖縄県医師会における災害医療の変遷と今後の方向—」、九州医師連合会から「九州医師連合会における災害時医療救護体制」の演題を出しました。そして、岩手県に行くこととなり、ついに念願かなって 3 月 10 日に大槌町を訪問することができました。突然の訪問にも関わらず、震災当時にお世話になった町役場の方々や先生方々にお

会いすることができました。当時を振り返りながら、今回の訪問を報告します。

2. 平成 23 年 3 月 11 日

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分に、東北地方三陸沖でマグニチュード 9.0 の地震が発生しました。東北地方から関東の太平洋沿岸部は巨大津波に次々と飲み込まれていき壊滅的な被害を受けました。

本会では 3 月 12 日に「東北地震に関する救急関係者会議」を開催、14 日に災害医療救助医療班の派遣を決定し携行品や移手段の派遣準備に入りました。物資が不足し、特にガソリンの確保は大変でした。派遣先は日本医師会から岩手県との要請を受けました。そして、岩手県医師会から連絡があり、16 日の朝に岩手県医師会と岩手医科大学対策本部で被災地の最新情報を集めて最終目的地を決定することになりました。



Fig.1 第一陣の出発式（平成 23 年 3 月 15 日）



Fig.2 震災当時の本会による仮設診療
（城山体育館、平成 23 年 3 月 18 日）



Fig.3 大槌町の入り口



Fig.4 震災当時の同場所（平成 23 年 3 月）

15 日 12 時 30 分、医師会館で出発式が行われました (Fig.1)。我々第一陣は 14 時 25 分発の JAL910 便で東京に入り、レンタカーにて沖縄県東京事務所に寄り、東北自動車道にて盛岡市を一路目指しました。16 日早朝に岩手県医師会館に到着し、岩手医科大学対策本部に移動して協議、まだ支援が入っていない大槌町へ行く事になりました。内陸から沿岸への道路はあちらこちらで寸断されており、到達ルートが分からず、遠野市の災害対策本部に寄りご協力頂きました。そして、雪の積もる県道 35 号（笛吹峠）を越えて沿岸の鶴住居に出て大槌町に入り、城山の裏から林道にて大槌町城山体育館に到達しました。そして、そこに仮設診療所を開設して活動を開始して、6 月 1 日に終了するまでの 79 日間で 15 陣 79 名が体育館で寝食をしながら医療支援活動を行いました (Fig.2)。

3. 令和 5 年 3 月 10 日

盛岡から大槌町まで

午前 8 時 30 分に盛岡市駅前でレンタカーを借り、盛岡南 IC から東北自動車道で南下、花巻 IC から釜石自動車道（東和 IC から復興道路と呼ばれ無料）に入り釜石に着きました。そこからは、当時、釜石市医師会災害対策本部ミーティングに通った国道 45 号線（大槌バイパス）で鶴住居を通過して沿岸部を北上しました。見覚えのある道でしたが沿道の風景は当時の記憶とは掛け離れて、あまりにも整然としていました。大槌町の入り口に着くと、ここにも見覚えのあるシーサイドタウンマストとローソンが見えて、大槌バイパスから右に県道 280 号大槌小釜線に入りました (Fig.3,4)。大きく左に曲がる道を進むと右手に小釜神社、大槌町役場（旧大槌小学校跡）が見え、そして城山体育館が見えてきました (Fig.5)。盛岡を出てから、休息



Fig.5 県道 280 号大槌小釜線から見た城山体育館



Fig.6 本会の仮設診療所を設置していた城山体育館トレーニングルーム（正面右白い2階建ての1階部分）



Fig.7 津波で壊滅した大槌町
(末広町方面 平成 23 年 3 月 17 日)



Fig.8 城山からみた大槌駅、左の瓢箪型の白い屋根が駅、中央奥に水門、防潮堤の向こうの大槌湾の右手に蓬莱島（灯台がある島）

を取りながらでしたが約 3 時間が経過していました。

大槌町の様子

さっそく、大槌町役場の健康福祉課を訪ねて当時お世話になった保健師さんを訪ねたところ、岩間純子さんが総務課に勤務されているとのこと、他の方は皆さん定年や退職をされました。岩間さんの出勤が午後 1 時からと分かり、城山体育館に行きました。

本会の仮設診療所に使用していた建物や入り口は当時のままで、12 年前が昨日の様に感じられました (Fig.6)。そして、大槌町の様子を見渡せる場所に行きました。初めて見て衝撃を受けた大槌町の様子を思い出しました (Fig.7)。今は、大槌湾に面した市街地周辺は延長 3km 高さ最大 15.5m とされる防潮堤と水門に囲まれています。震災時は津波に流された JR 山田

線（現三陸鉄道リアス線）の鉄橋や大槌大橋は再建され、旧大槌町役場跡は更地になり、その隣地には大槌町文化交流センター「おしゃっち」が建てられて、岩手県立大槌病院（以下、大槌病院）があった辺りは町営野球場になっていました（表紙写真、巻頭写真）。防潮堤の向こうに広がる大槌湾には、「ひょっこりひょうたん島」のモデルとなった蓬莱島（ほうらいじま）を望むことが出来ました。大槌駅も新しく再建されていました (Fig.8 ~ 10)

道又 衛先生訪問

道又衛先生は大槌町内で開業されていて、被災され津波が診療所に押し寄せ中、階上に避難されるも首まで浸かりながら助かり、本会第一陣が到着する少し前までは城山体育館で避難されてきた方々の救護活動をされていました。一旦、盛岡へ行かれて、ご家族を避難させられ



Fig.9 大樋駅



Fig.10 大樋駅の展望デッキから見た城山方面



Fig.11 震災当時、本会の仮設診療所で診療される道又先生 (城山体育館、平成 23 年 5 月)



Fig.12 道又衛先生と (道又小児科内科医院にて)

た後に再び城山体育館に戻られ、しばらくの間、本会と一緒に診療をされていました (Fig.11)。その後、大樋高校の近くに仮設診療所を開設された後に、大樋川の上流に新しく診療所を再建されています。

待合室で待っていると、診察室からニコニコしながら出てこられた先生は、びっくりした様子でもありましたが、昔と変わらない様子でした。「昨年、沖縄から当時来ていた看護師さんが来てましたよ、ぜひ皆さんも 9 月 23 日に来て下さい。大樋の大きなお祭りがあるんですよ。」との伝言を預かりました (Fig.12)。

大樋町役場訪問

昼食に大樋川近くの JA 直売所「母ちゃんハウスだぁすこ沿岸店」で、昭和 44 年に大樋町で誕生したといわれる「磯ラーメン」を堪能して、役場に向かいました。

現在の役場は大樋小学校跡にあり、城山のすぐ下に建っています (Fig.13)。当時は校庭か

ら教室や体育館の中まで車や瓦礫が流れ込んでいました (Fig.14)。平成 23 年 4 月には仮設の役場が建てられました (Fig.15)。

総務課を尋ねると岩間さんが待っていて下さいました。震災では町三役はじめ、町職員幹部ら約 60 人が役場とともに津波に飲み込まれました (Fig.16)。そして、被災後に職務代理者を勤められていた平野公三総務課主幹 (当時) は、現在は町長をされており、お会いすることが出来ました。町長は、当時ご自身も本会の仮設診療所にお世話になったと話されていました。岩間さんは、当初は小職らと共に活動し、途中から保健師としての業務に移行していかれたことなどを町長にも伝える様に話をされ、当時の話題で時間が過ぎていきました。お二人からはもったいないくらいの感謝の言葉を頂きました (Fig.17)。

植田 俊郎先生訪問

植田先生は「第 10 回日本医師会赤ひげ大賞」を受賞されたのでご存知の方も多いと思います。



Fig.13 大槌小学校跡に建つ大槌町役場



Fig.14 震災当時の大槌小学校（平成 23 年 3 月 18 日）



Fig.15 仮設の大槌町役場
（大槌小学校校庭、平成 23 年 4 月 30 日）



Fig.16 震災当時の大槌町役場（平成 23 年 3 月）

先生も大槌町で開業されていて被災され、クリニックの4階に避難された後、自衛隊のヘリコプターで救助され、避難所となった寺野弓道場に行かれて救護活動をされていました。寺野弓道場の避難所には本会と同時期に長崎大学が支援に入り、後に大阪府医師会が支援を続けました。当時、植田先生にお会いした時の避難所は、弓道場であったために床はなく地面の上にダンボールやシートを敷いただけの状態でした。

先生は寺野に仮設診療所を建てられて診療を再開され、その後に植田医院を現在の小槌川の上流に再建されています。先生は昼休み中でしたが、突然の訪問に驚かれ、また喜んで頂きました。帰るときは、玄関から姿が見えなくなるまで送って頂きました (Fig.18)。

寺田 尚弘先生訪問

寺田先生は釜石市医師会災害対策本部長として、シープラザ釜石2階で毎日ミーティングを開催し、釜石と大槌におけるチームの活動調整

をされていました (Fig.19)。本会も毎日参加していました。後の熊本地震で本会が担った南区保健医療調整本部の運営では、この時の経験が大変役に立ちました。当時、大槌町での本会の活動を終了するにあたっては、寺田先生と相談しながら撤収計画を立てました。

現在、先生は岩手県立釜石病院に勤務されています。当時と変わらず若々しくエネルギーで「皆さんには城山を守って頂いた」と仰って頂きました (Fig.20)。

大槌病院

震災時は大槌川の下流近くにあり、津波にて壊滅しました (Fig.21)。支援に行かれた方はその様子を近くで目にされたことと思います。そして、震災発生1ヶ月後の4月には前述した小槌神社の境内にあった上町ふれあいセンターに仮設診療所を開設して診療を再開 (Fig.22)、その6月に大槌高校の近くに仮設診療所を建設して移転しました (Fig.23)。そして、2016



Fig.17 岩間純子さん、小職、平野公三町長



Fig.18 植田俊郎先生と（植田医院にて）



Fig.19 震災当時、釜石市医師会災害対策本部で活躍される寺田先生（窓側手前、平成 23 年 5 月）



Fig.20 寺田尚弘先生と（岩手県立釜石病院にて）

年に小槌地区に現在の病院が再建されました (Fig.24)。立地は植田医院の目の前でした。

4. おわりに

大槌町は、震災で町は壊滅的な被害を受けました。そして、12 年が経ちハード面での復興事業はほぼ終了したそうです。震災後に町外から来られて新規開業された先生もおられます。新たな町は造成されたばかりの住宅地の様に整然と区割りされていましたが、道々の配置は当時と同じ様にも見えました。当時見た役場も大槌病院もそこにはなく、新しい大槌駅を中心に真新しい家々が散在していました。そして、多くの空き地が目立ち、車や人の往来もまばらで閑散とした感は否めませんでした。東日本大震災では 1,286 人が犠牲になりました。震災後は町を離れた人も多く、働き手も減少もして、震災前には 15,000 人ほどあった町の人口は、現在は 11,000 人ほどになっています。町の復興にはまだまだ多くの課題があります。しかし、お会い

した皆さんは明るく力強くお話されていました。

我々は、東日本大震災で大槌町に派遣して頂き、貴重な経験と多くのことを学ばせて頂きました。これらを今後の備えに活かしていくことは勿論ですが、これからも微力ながら大槌町を応援して行きたいと思えます。

大槌は三陸ジオパークの一部で、遺跡もあり、ひょっこりひょうたん島もあり、吉里吉里国もあり、観光地として魅力のあるところ。海からは牡蠣、毛蟹、鮑、帆立、雲丹、川では鮭、そして山からはジビエ、松茸と山海の幸の宝庫です。ご訪問下さい。

そして、『ふるさと納税は是非、大槌町へお願い致します。』

写真のいくつかは、災害医療救助班各陣で大槌にいかれた方々から本会に頂いたものを使わせて頂きました。



Fig.21 震災当時の大槌病院（平成 23 年 3 月 18 日）



Fig.22 岩手県立大槌病院仮設診療所
（小槌神社境内の上町ふれあいセンター、平成 23 年 4 月）



Fig.23 岩手県立大槌病院仮設診療所
（大槌川上流、平成 23 年 11 月 21 日）



Fig.24 現在の岩手県立大槌病院（小槌川上流）



Fig.25 第 15 陣が城山の皆様から頂いてきたブルーシート
（医師会館、平成 23 年 6 月 1 日）

参考文献

- 1) 沖縄県医師会編：東日本大震災災害救助医療班活動記録 - 沖縄県医師会医療支援活動記録集 -, 2011 年
- 2) 岩手県医師会編：強絆復興 - 東日本大震災対応の記録 -, 2014 年
- 3) 出口 宝, 富田秀司, 近藤 豊他：災害重急性期から慢性期における医療支援活動に関する検討 - 東日本大震災・大槌町における検証から -, 日医雑誌, 2012;140:2361-2367